

「正韻平・上・去・入聲音切字釋」について

遠 藤 由 里 子

一、明代、特に萬曆年間（1573～1620 A.D.）には、夥しい数の〈海篇〉と称される辞書が刊行された。⁽¹⁾これ等〈海篇〉の一つ『重校五音類聚四聲切韻直音海篇大全』⁽²⁾（以下『海篇大全』と略称）は、萬曆壬寅（三十年、1602 A.D.）王稗登⁽³⁾序刊、本書は他の〈海篇〉の多くがそうであるように、魁本（二層本）であり、上層には全76韻から成る韻書「正韻平・上・去・入聲音切字釋」⁽⁴⁾（以下「音切字釋」と略称）が、下層には全444部首で構成される字書⁽⁵⁾が配されている。⁽⁶⁾

小稿では、『海篇大全』に於いて、韻書に相当する「音切字釋」が如何なる韻書であるのか、その概略を述べたい。

二、先ず、「音切字釋」は以下に示すように、平・上・去声各22韻、入声10韻の計76韻で構成されている。

平声：東・支・齊・魚・模・皆・灰・眞・寒・刪・先・蕭・爻・歌・麻・
遮・陽・庚・尤・侵・覃・鹽

上声：董・紙・齊・語・姥・解・賄・軫・早・産・銑・篠・巧・哿・馬・
者・養・梗・有・寢・感・琰

去声：送・寘・霽・御・暮・泰・隊・震・翰・諫・霰・嘯・效・箇・禡・
蔗・漾・敬・宥・泌ミ・勘・豔

入声：屋・質・曷・轄・屑・藥・陌・緝・合・葉

この韻目数、韻目名称及びその配列順は、明初につくられた勅撰韻書『洪武正韻』⁽⁷⁾（1375 A.D.）のそれと完全に一致する。「音切字釋」はその書名に「正韻」と冠されている所からもわかるように、少なくともその体裁は『洪武正韻』に倣った模様である。

韻目数、韻目名称及びその配列順は『洪武正韻』と一致するが、それでは、各韻目（大韻）内はどのように構成されているであろうか。無論、各大韻内にはいくつかの小韻（同音字のグループ）がたてられ、更に各小韻下には同音字が配列される訳であるが、小韻及び小韻下の同音字の配列に於いても、『洪武正韻』と比べて、ごく僅かな異同が認められるだけである。この僅かな異同は、専ら両書の親字（小韻代表字プラス小韻下の同音字）数、即ち収録字数の多寡に依るものと考えられる。両書の全収録字数及び全小韻数をそれぞれ平・上・去・入声に分けると以下の如くなる。

	平 声	上 声	去 声	入 声	計
「音切字釋」	5508字	2875字	3673字	2492字	14548字
	668小韻	546小韻	650小韻	374小韻	2256小韻
『洪武正韻』	5523字	2879字	3679字	2495字	14576字
	668小韻	546小韻	650小韻	375小韻	2257小韻

『洪武正韻』にあって「音切字釋」には収められていない親字は、平声で15字、上声で4字、去声で6字、入声で3字（1小韻を含む）、合計28字で、この多寡が各大韻内の小韻配列及び各小韻内の親字配列の差違となって表われている。全収録字数の0.2%弱という数字の上では僅かな差であるが、収録されなかった、即ち削除されたことに何が意義があるのだろうか。以下に削除された28字を『洪武正韻』での掲載順に示す。

所属大韻、被注字（○該当小韻代表字）、反切注、義注の順、番号は遠藤。

東韻①蕤（○叢）、徂紅切、同上、……

支韻②駮（○霏）、芳微切、馬逸足

齊韻③齊（○齋）、牋西切、……、又見前

魚韻④列（○諸）、專於切、……、又屑韻

灰韻⑤睨（○規）、居爲切、小見貌、荀子、學者之鬼、睨睨然

刪韻⑥藜（○煩）、符艱切、白蒿

⑦蟠（○煩）、符艱切、……、亦作蕃蟠

⑧蟠（○煩）、符艱切、……、又寒韻

先韻⑨籊（○籊）、諸延切、……、亦作屨屨

⑩屨（○籊）、諸延切、見内則篇

⑪飡（○籊）、諸延切、孟子、飡鬻之食

- ⑫ 醜（○ 醜）、諸延切、……、又支紙二韻
 歌韻⑬ 穠（○ 羅）、郎何切、穀積也
 庚韻⑭ 弘（○ 橫）、胡盲切、玉篇、安也、說文、屋饗、又庚韻、从宀誤
 尤韻⑮ 苒（○ 求）、渠尤切、……、又見上、又爻韻
 軫韻⑯ 醜（○ 醜）、委粉切、……、又震韻
 ⑰ 苑（○ 苑）、委粉切、屈也、積也、詩、我心苑結、……、又銑質二韻
 産韻⑱ 儻（○ 坦）、他但切、莊子、儻儻然不趨、餘音見下
 ⑲ 憚（○ 坦）、他但切、荀子、是憚憚非變也、注古憚與坦同
 送韻⑳ 闕（○ 哄）、胡貢切
 寘韻㉑ 備（○ 避）、毗意切、……、又屋韻
 御韻㉒ 譽（○ 豫）、羊茄切、……、亦作輿、又魚韻
 ㉓ 漚（○ 慮）、良據切、漚去滓也
 震韻㉔ 瑾（○ 僅）、具吝切、美玉、楚辭、懷瑾握瑜
 宥韻㉕ 誥（○ 祝）、職救切、又尤韻
 質韻㉖ 愴（○ 恤）、雪律切、漢書、愴於邪說
 緝韻㉗ 泣（○ 泣）、乞及切、羹汁、說文、幽溼也、从泣从月、作涪誤
 ㉘ 急 居立切、疾也、緊也、窘也、褊也、追也

削除対象となり得る理由を持つものを挙げると、

- ①：その義注に「同上」とあるように、同一小韻内に同義語の「叢」があるためか。
 ⑭：同一小韻内に
 玉篇、安也、說文屋饗、又登韻
 とほぼ同様内容の義注を持つ「弘」字があり、重複を避けるための削除と考えられる。
 ⑰：その義注「屈也、積也、……」は、本来質韻「苑」に付されるべきものであり、軫韻「苑」には相応しくないと考えての削除か。⁽⁸⁾
 ⑳：『洪武正韻』には義注がつけられず、又「闕」の直前に「闕」がある所から、この二字を同一音・同一義を持つものと見做して、一方を削除したか。
 ㉗・㉘：『洪武正韻』では隣合わせに並べられている。㉗は「泣」小韻所属字、㉘は「急」小韻代表字である。この「泣」「急」両小韻所属字を示

すと次のようになる。

◦泣、乞及切、(所属字) 漑

◦急、居立切、(所属字) 佞、給、級、汲

この『洪武正韻』「泣」「急」小韻に該当する「音切字釋」箇所を同様に示すと、

◦泣、音乞、⁽⁹⁾ 乞及切、(所属字) 佞、給、級、汲

となり、『洪武正韻』では別韻として立てられていた「急」小韻が「泣」小韻へと併合された形になっている。そしてその際、「泣」小韻の「漑」と「急」小韻代表字である「急」が削除されたことになる。何故「音切字釋」はこのような処置をとったのか。先ず考えられるのは、「音切字釋」では、「急」は「泣」と同音であると見做して、⁽¹⁰⁾「急」小韻を「泣」小韻へ併合したということである。しかし、⁽¹¹⁾「漑」はさておき、⁽¹²⁾「急」は小韻代表字でもあり、又、その持つ義注の重要性から考えても緊要字であるのに、「音切字釋」に「急」が立てられていないのは非常に不自然である。更に、小韻の削除、即ち、二つ或は二つ以上の小韻の併合例は、この「泣」「急」小韻が唯一のものである。以上から推して、「音切字釋」は意図的に「急」を削除したのではなく、何らかの理由に依り、結果的に欠落してしまったのではないと思われる。

③・④・⑦・⑧・⑨・⑫・⑮・⑯・⑱・㉑・㉒・㉕：強いて理由を捜せば、義注中に「又見上」、「又某韻」、「亦作某」等とあるためか。

「音切字釋」で削除された28字は、1小韻も含めて、きわめて散発的なものであり、重複している字を削ったり、韻の併合を示そうとするならば、28字という僅かな例で十分な筈がない。恐らく、一定の規準を以て削除したのではないと考えられる。

次に、被注字につけられている注釈（音を示す音注と意味を示す義注）は、義注については、韻書或は字書には伝統的な義注のスタイルがあり、どの部分が『洪武正韻』から受け継いだ義注であるのか、断定することはできないが、全体的に見て、「音切字釋」義注は概ね『洪武正韻』義注を簡略化した形をとっている。『洪武正韻』「東」の義注を例にして見ると、

東方也、説文、動也、从日在木中、漢志、少陽者東方、東動也、陽氣動於時爲春、又陽韻、俗作東（・部分が「音切字釋」義注と重複する）となり、他の義注に於ても、部分的に「音切字釋」にあって『洪武正韻』に

無い例は殆ど見られない。

音注は、「音切字釋」では直音注と反切注が併記されているが、直音注は本来『洪武正韻』には無いものである⁽¹¹⁾から除外して、反切注も次項で述べるように、やはり『洪武正韻』を継承した跡がはっきりと表われている。

三、「音切字釋」には、前表に示したように平・上・去・入声あわせて2256小韻あり、この小韻数はイコール反切数ともなる。⁽¹²⁾この反切を『洪武正韻』反切と照合すると、ここでもほぼ一致が見られる。異同は次にあげる57例のみである。

所属大韻、被注字、『洪武正韻』反切、「音切字釋」反切、直音注の順、番号は遠藤。

<平声>

- 灰韻①痿、儒佳切、儒加切、煨
 寒韻②官、沽歡切、沽灌切、冠
 ③剗、烏歡切、烏勸切、碗
 刪韻④餐、千山切、子山切、叁
 爻韻⑤褒、博毛切、博無切、褒

<上声>

- 姥韻⑥楚、創租切、創祖切、礎
 賄韻⑦壘、魯猥切、魯濇切、磊
 ⑧跬、犬葵切、夫葵切、踬
 軫韻⑨蠹、許謹切、五謹切、引
 ⑩胤、初謹切、初諷切、磳
 旱韻⑪斷、徒管切、徒官切、段
 ⑫卵、魯管切、魯管切、鴛上声
 産韻⑬産、楚簡切、楚簡切、鏟
 ⑭版、補縮切、捕縮切、板
 巧韻⑮抱、蒲皓切、蒲的切、鮑
 哿韻⑯瘳、丁可切、下可切、朶
 ⑰嗟、千可切、十可切、脛
 梗員⑱杏、何梗切、梗使切、何
 ⑲悻、下頂切、丁頂切、倅
 ⑳茗、莫迴切、徒胼切、冥

琰員⑲漸、秦冉切、忝冉切、賤

⑳點、多忝切、多添切、玷

<去声>

寘韻㉓閉、必弊切、必弊切、蔽

㉔掣、天制切、尺制切、濫

隊韻㉕翠、七醉切、士醉切、脆

㉖萃、秦醉切、秦醉切、悴

震韻㉗閏、儒順切、儒浚切、潤

㉘奔、通悶切、通悶切、搬

㉙趁、丑刃切、玉刃切、疢

㉚鈍、杜困切、枉困切、遁

㉛艮、古恨切、占恨切、亘

霰韻㉜繪、時載切、時戰切、善

嘯韻㉝竅、苦弔切、五弔切、髻

效韻㉞效、胡孝切、胡考切、効

禡韻㉟骸、枯架切、枯駕切、駝

漾韻㊱向、許亮切、有見切、餉

㊲亢、口浪切、白浪切、抗

㊳胖、匹絳切、四絳切、蚌

敬韻㊴硬、魚更切、五更切、鞭

㊵倩、七正切、七登切、清

勘韻㊶擔、都濫切、都感切、澹

㊷擻、所鑑切、听鑑切、懣

㊸梵、扶泛切、扶乏切、飯

<入声>

屋韻㊹夙、蘇玉切、蘇木切、粟

㊺續、松玉切、私玉切、俗

質韻㊻密、覓筆切、覓華切、宓

轄韻㊼刺、郎達切、問達切、粹

藥韻㊽縛、符約切、笳約切、房入声

㊾屨、烏郭切、烏都切、屨

陌韻㊿隙、乞逆切、迄逆切、郟

- ㉑ 覓、莫狄切、莫秋切、冪
合韻㉒ 始、遏合切、遏合切、渴
㉓ 帀、作荅切、作答切、匝
㉔ 納、奴荅切、答荅切、內
㉕ 鹵、昵洽切、昵洽切、納
葉韻㉖ 攝、失涉切、失業切、涉
㉗ 轟、尼輒切、尼參切、鑷

以上の57例は、ほぼ、

1. 「音切字釋」の誤刻と思われるもの、
 2. 「音切字釋」誤刻の可能性もあるが、意図的に『洪武正韻』反切を改めたと思われるもの、
 3. 反切用字の上では『洪武正韻』と異なるが、その示す音は同じもの、
 4. 『洪武正韻』の誤刻を改めたもの、
 5. 意図的に反切を改め、『洪武正韻』と異なる音を示したと思われるもの、
 6. 其他
- の6パターンに類別できる。

1. 「音切字釋」の誤刻と思われるもの、28例。

- ②・③：反切下字にそれぞれ「灌」「勸」と去声字をあてているが、直音注にそれぞれ「冠」「琬」と平声字があてられている所から、字体の相似に依る誤刻。
- ⑦：反切下字に平声字があてられているが、直音注に上声字があてられている所から、字体の相似に依る誤刻。
- ⑧：反切上字「夫」は「犬」の誤刻。
- ⑩：反切下字「諷」は、直音注「磳」から考えて、恐らく旁部分の誤刻。
- ⑪・⑫・⑬：共に反切下字に平声字をあてているが、これも直音注にそれぞれ上声字がつけられている所から誤刻。⁽¹³⁾
- ⑮：反切下字に入声字がつけられているが、直音注が「鮑」であること、字体の相似から、誤刻と考えられる。
- ⑯・⑰・⑱：反切上字がそれぞれ「丁」「千」「下」の誤刻。
- ⑲：『洪武正韻』反切が、直音注「何」と反切注「梗使切」に混じた結果の誤刻と考えられる。

- ⑲：反切上字「忝」は「秦」の誤刻。
⑳：反切下字に平声字があてられているが、直音注「玷」から、「添」は「忝」の誤刻。
㉑：反切上字「土」は「七」の誤刻。
㉒・㉓・㉔：反切上字がそれぞれ「丑」「杜」「古」の誤刻。
㉕：反切下字に上声字があてられているが、直音注「効」から、「考」は「孝」の誤刻。
㉖・㉗：反切上字がそれぞれ「口」「匹」の誤刻。
㉘：反切上字「听」は、直音注「懺」から考えて、「所」の誤刻。
㉙：反切下字に入声字があてられているが、これも直音注「飯」から、「泛」の誤刻。⁽¹⁴⁾
㉚：反切下字「葦」は「筆」の誤刻。
㉛：反切上字「笙」は「符」の誤刻。
㉜：反切下字に平音字をあてているが、直音注「蠖」から考えて、入声の他声調への派入例ではなく、字体の相似による誤刻と思われる。
㉝：反切下字「秋」は「狄」の誤刻。⁽¹⁵⁾
2. 誤刻の可能性もあるが、意図的に反切を改めたと思われるもので、反切上字（声母）が『洪武正韻』と異なる、8例。
- ④：「千」（清母）と「子」（精母）
⑨：「許」（曉母）と「五」（疑母）
⑭：「補」（幫母）と「捕」（並母）
⑳：「苦」（溪母）と「五」（疑母）
㉑：「松」（邪母）と「私」（心母）
㉒：「乞」（溪母）と「迄」（曉母）
㉓：「奴」（泥母）と「努」（娘母）
㉔：「呢」（娘母）と「昵」（泥母）
- 字体の相似に依る単なる誤刻の結果と考えられる例もあるが、「音切字釋」に於ける声母の混用を示す一端とも十分考えられる。
3. 反切用字の上では『洪武正韻』と異なるが、その示す音は同じもの、7例。
- ㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜はそれぞれ反切下字を、㉝は反切上字を異にするが、それぞれの反切によって得られる音は同一である。必要が認めら

れないのに、何故、用字を変えたのか。㉓・㉔・㉕は或は字体の相似に依る誤刻とも考えられる。

4. 『洪武正韻』誤刻を改めたもの、5例。

⑥：反切下字の平声字「租」を「祖」に、

⑭：反切上字「天」を「尺」に、

㉑：反切上字「通」を「逋」に、

㉒：反切下字「載」を「戰」に、

㉓：反切下字「含」を「合」に、

いずれも、字体の相似に依って起きたであろう『洪武正韻』側の誤刻を、然るべき姿へと改めている。⁽¹⁶⁾

5. 意図的に反切を改め、『洪武正韻』と異なる音を示したと思われるもの、2例。

④：反切下字を三等韻の「玉」から一等韻の「木」に改めている所から、該当韻に於いて直拗対立が消滅していることを示している。

⑦：反切下字に上声字「爹」をあて、入声が他声調へと派入していることを示している。

6. 其他（1～5に入らないもの）、7例。

①：反切下字を合口字「佳」から開口字「加」に改めているが、その意図は不明。

⑤：反切下字に模韻字「無」をあてているが、これは俗に「毛」字の代用として「無」字を、逆に「無」字の代用として「毛」字の使用が行なわれていたためか。⁽¹⁷⁾

㉐・㉑：反切上字下字共、字体の相似に依る誤刻とも考えられず、不可解。

④・④：共に去声韻であるのに、反切下字に④では平声字「登」を、④では上声字「感」をあてているが、これも意図不明。⁽¹⁸⁾

④：反切上字に唇音字「問」があてられているが、これも字体の相似に依る誤刻とも考えられず、不可解。

以上、『洪武正韻』と「音切字釋」との反切注異同例を便宜上6グループに分類したが、3と4については、或は今回使用した隆慶元年刊本以外の『洪武正韻』では「音切字釋」と一致する可能性もあろう。問題となるのは、2と5、特に反切上字を異にする2のグループで、果してこのような声母の

混用例があったのか、単なる誤刻の結果であるのか、この点を明らかにするには、反切注と併記されている直音注の検討が必要となる。その結果、声母だけでなく、韻母に於いても、反切注からその片鱗が見られた併合状況が明らかとなる。

「音切字釋」は、表面的には、大韻・小韻・反切注・義注の記載順・内容に至る迄、ほぼ全面的に『洪武正韻』体裁を踏襲して作られた韻書と言える。しかし、反切注に於ける僅かな差違から、更に、直音注の分類・整理によって、『洪武正韻』とは異なった「音切字釋」独自の音体系を得ることができよう。これを次の課題としたい。

注

- (1) 抽稿「〈海篇〉諸本考」梅光女学院大学『論集』第22号、平成元年3月。
- (2) 本稿では蓬左文庫所蔵本を使用した。
- (3) 『明史』卷二百八十八、列傳第一百七十六、文苑四に伝がある。
- (4) この名称は、平声では「韻類平聲音切字釋」と記されているが、平声以外ではそれぞれ「正韻上聲音切字釋」、「正韻去聲音切字釋」、「正韻入聲音切字釋」と記されているため、通して「正韻平・上・去・入聲音切字釋」とした。
- (5) 字書部分については特に呼称はつけられていない。
- (6) このほか、上下二層に亘って、「四書五經鑑史音釋」、「分毫字義」、「三十六字母切韻法」等、文字学・音韻学修得上必須とされる様々な知識が盛り込まれている。
- (7) 樂韶鳳・宋濂等奉勅撰。本稿では明・隆慶元年(1567A. D.) 跋刊本を使用した。
- (8) 質韻「苑」は、『洪武正韻』・「音切字釋」共に「鬱」小韻(反切は紆勿切)下に、
屈也、積也、詩、我心苑結、亦作宛、通作鬱、又軫銃二韻
と義注がつけられている。
- (9) 「音切字釋」では、後述するように音を示す注として、反切注の他に直音注も併記されている。
- (10) 「泣、乞及切」と「急、居立切」が同音であるならば、反切下字「及」と「立」は元来同音であるので、反切上字(声母)が問題となる。即ち、「泣」の反切上字「乞」(溪母)と「急」の反切上字「居」(見母)を同音声母と見做したことになる。
- (11) 別音を示す又音注では、しばしば直音注がつけられている。
- (12) 又音反切は除く。

- (13) 管～菅、簡～藺の誤刻例は、他にも数箇所で見られる。
- (14) 被注字「梵」は元来-m韻尾で終る音であったが、-n韻尾で終る「飯」で直音注がつけられている所から、-m韻尾の-n韻尾への合流の一端を示している。
- (15) 秋～狄の誤刻例は他にも数箇所で見られる。
- (16) 本稿では明・隆慶元年跋刊本を使用したか、数ある『洪武正韻』刊本の中には、この様な誤刻の無い反切注を記しているものが存在する可能性もある。
- (17) 『漢語方音字匯』（北京大学中国語言文学系語言学教研室編、1989年6月）「無」の項に、
俗讀俗寫爲“毛”
とあり、古例として『後漢書』馮衍傳を引いている。
“飢者毛食、寒者裸跣”。李賢注：“案：衍集‘毛’字作‘無’。”
(引用文中の簡体字は繁体字に改めた)
- (18) ㊦では直音注も平声字「清」をあてているが、『洪武正韻』・「音切字釋」では、去声敬韻「倩」小韻下にも「清」が収められている。